

夫れ五行子ごぎょうしにありといふ、彼の紹興せうこうの十四年、楽平原らくへいげんなる湯泉ゆせんの、往昔むかしを茲ここに湖水こすいの、水気旺すいききさかんに浩浩かうかうと、澄すめるは登のぼる天津空あまつそら、雨あめも頻しきりと古御所こみよに、解語かいごの花はなの立姿たちすがた

（三下り）恋は曲者世ひとの人の、迷まよひの淵瀬ふちせきのどくの、山やまより落おつる流れの身み、うき音ねの琴ことのそれならで

妻呼交つまよかけす雁金かりがねの、其玉章そのたまぢやうをかくばかり、色に手てだれの傾城けいじやうも、焦こる人ひとに逢あひ見ての、後の思おもひにくらぶ山やま、忍しのぶ涙なみだの春雨はるあめを、傘かさに凌しのいで来きたりける大宅おほやの太郎たろうは目めを覚めし、将門山まさかどやまの古御所ふるごしよに、妖怪やうかい変化へんげ棲家せいかを求め、人倫じんりんを悩なやます由よし 頼信公よりのぶこうの仰おほせを受うけし光国みつくにが、暫しばらし目睡まどろむ其内そのうちに、見慣みなぬ座敷ざしきの此体このていは、正ただしく変化へんげの所為ところゐなるか

申し申し光国様

扱さてこそ変化へんげごさんなれ、イザ正体しょうたいをと立寄たちよる光国みつくに、女をんなは慌あわて押止おしとどめ

アア申し、様子言やうすいはねばお前の疑念ぎねん、私は都みやこの島原しまはらで、如月ごとつきといふ傾城けいじやうで御座ござんすわいな

ヤア心得こころえ難がたき其一言そのいちごん、波濤はたうを隔へだてし此国このくにへ、傾城遊女けいじやうぜいよの身みを以もちて、来きたり住すむべき謂いはれなし、よし又都またみやこの遊女いうざうにせよ、ついに見みもせぬ其方そなたが、何故我なにゆゑわれをと不審ふしんの言葉ことば

サア御尋ごたづねなくともお前の胸むね、晴はるすは過すぎし春はるの頃ころ

何と

申し

嗟峨さあや御室おむろの花盛はなり、浮気うはきな蝶てふも色いろかせぐ、郭くわの者ものに連つれられて、外珍ほかめづらしき嵐山あらしやま

ソレ覚えてか君様きみさまの、袴はかまも春はるの臘染ろうぞめ、臘氣ろうきならぬ殿振でんふりりを、見染みそめてそめて恥ちかしの、森もりの下露したつゆ思おもひは胸むねに

光国様みつくにさまと言いことは、其折知そのりりて旦暮あぐれに、女子をなごの年としが今日けふの今いま、届とどいて嬉うれしい此仰このおほせ、疑念ぎねん晴はれして下くださんせ、やいのやいのと取組とりぐり、赤あからむ顔かほの袖屏風そでびやうぶ、光国態みつくにわざと打解うちとけて

いかさま切きなるおこしが心底しんてい、左程さほどに思おもふ愛情あいじやうを、捨すつるは却かへて本意ほんいならず、疑念ぎねんは薩張晴さつぱりはれたれども、武迎ぶへん修行しやうぎやうの我身わがみの上うへ、望のぞみ果はたさば兎とも角かくも、夫そに付つても往古むかうの、東内裡とうないぢりの莊嚴しやうげんを、思おもひ出いせばオオ夫およ

扱さても相馬さうまの将門まさかどは

威勢いきせいの余あまり謀叛ぼうはんと共とも 企くはだて並ならべし大内裡だいいぢり、騎者きしやの振舞ふりま舞ま都みやこに聞きこえ、朝敵討手あそくうつけの三大将さんだいしやう、頃ころは二月ふたつきの百千鳥ももぢどり、真先まづかけて押寄おしよする、数度すどの軍いくさも辛島あつしまに、集あつり勢ぜいの悲かなしさは、風に残のこんの雪崩ゆきだれ、むらむらばつと吹散ふきちりたり

平親王へいしんが最期さいきの一戦いっせん、見みよや見みよやと夕月ゆふづきの、鹿毛かひなる駒こまに打乗うちのりりて、向むかふ者ものをば拝がみ打うち、立割たちわりほろ付車切つぎぐるまきり、斯かと見るより上平太じやうへいだいが、放はなつ矢先やまきに将門まさかどは麒麟きりん窠くさ深ふかに射透いとされ、馬うまよりどうと果敢くわかんなき落命らくめい、寄手よては勇勝ゆうしょう闘たたかと、今見いまみる如ごとく物語ものがたる

思おもへば無念むねんと如月ごとつきが、齒はを喰くしはる忍しのび泣なき、さこそと光国みつくに詰寄つめよりて

合点がてんのゆかぬ女をんなが振舞ふりま、今合戦いまかくしの様子やうすを聞きき、頻しきりに催もよほす落涙らくなみは、と見咎みとがめられてそらさぬ顔かほ 小ホホホホ何なんの私わたくしが泣なもので、泣なたと言いはオオソレソレ、可愛男かひなこに別わかれの鶏鐘けいしやう、後朝告きさねつてる朝雀あさづめ、雀すずめが鳴なたと言いふこといなあ

ほのぼのと雀すずめ轉くるまる奥座敷おくざしき、灯火とうししめる男おとこども 屏風びやうぶ一重ひとへの彼方かなたには、まだ睦言むつごんの聞きこゆれど

我われは見足みたりらぬ夢ゆめをさき、早後朝はやごちうと引締ひきしむる

帯隠おびかくさる戯動ぎどうも

憎にくうはあらぬ移香うつりかに、又盃盞またはいさんの数かずふれて、三さんの切きたる三味線さんまいせんも、弾ひかるる程ほどは弾ひて見みん、仇心あだこころの仇枕あだまくら

交かはさぬ先さきもあるものを、往いなば往いなんせよしや只ただ、独浮身ひとりうきみを数かずへ唄うた、郭くわの手管てくだに紛まぎらかす、はづみに落おとせし錦にしきの御旗みきた

コリヤ是慥これたしかに

イヤ夫れは

夫れとは

それ

それそれそれそつこでせい

一つ一夜ひとよの契ちぎりさへ、二ふたつ枕まくらの許ゆるしなき、三みつ三重四重みへよへまはり気げは、いつまで解とけぬ常陸帶みちのへたがひ、六むつ酷ひどいと思おもひはせいで、七ななつの鐘かねの恨うらめしや

艶なまめかし

扱さてこそ扱さてこそ相馬さうま錦にしきの此旗このはたを、所持しよじなすからは問とに及およばず、将門まさかどが忘形見わすれがたみ、滝夜叉姫たきやしひめであらうがな

イイヤ知らぬ覚えおぼえはないぞ

ヤア覚えおぼえないとは卑怯ひけなの一言いちごん 肉芝仙にくしせんより伝つたはりし、蝦蟇がまの妖術まじうつ習おぼえ、此古御所このふるごしよに隠かくれ棲すむこと、叡聞ゑいぶんに達たうせし上うへは、最早もはや免まなれぬおことが

身みの上うへ、本名ほんな名乗なやりて降参かうさんなせ

チエエ残念ぞんぜんや口惜くちやくしや、斯かなる上うへは何なにをか包つまん、真我まごわれこそ平親王へいしん将門まさかどが娘むすめ、滝夜叉たきやし又なるは

扱さてこそナ

一器量ひときりやうある汝故なご、命いのちを助け味方みかたにと、思おもふ心が仇あだとなり、見現みあらはされし上うへからは、習ならひ覚えし妖術まじうつにて、光国みつくにそちが命いのちを絶たつ、覚悟かくごなせ

何を小癪こしやくな

怒いかれる面色おもてつら忽然いつぜんに、柳眉逆立りうびぎさだちつく呼吸いきは、炎ほのとなつて焰々えんえんたる、妖術魔術まじうまじうの業通ごふつうに、流石さすがの勇者ゆうやもたちたちたち、梢木せうこの葉はさらさらさら、魔風まふうと俱ともに光国みつくにが、襟上えりがみ抓つかんで宙宇ちゆううの争闘あらう、怪あやし恐おそろし世よに謳うたふ、時ときを忍しのぼんの忠義伝ちゅうぎでん、歌舞伎かぶきに残のこす物語ものがたり、拙つたき筆ふでに書納かきをむ